
悪魔の涙

紫聖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔の涙

【Nコード】

N3221M

【作者名】

紫聖

【あらすじ】

ある国で、フェアリット男爵家が火事に見舞われました。男爵と嫡子、そして五人の娘達。

たった一人だけ、融資を申し入れた人物がいました。『マティンリ侯爵』彼の望みは、フェアリット男爵家の末娘を手に入れること、ただそれだけ。

1・悪魔族 侯爵様

「火事になったお屋敷や使用人の保障の為の融資を致しましょう。」
指を組み換えながら、余裕の表情を浮かべてみせる。すると、フェアリット男爵はほっとした様子を見せた。

「マティンリ侯爵有難うございます。よろしくお願いいたします。」
言い終わるのを待ち、付け加える。

「但し、一つ条件があります。」

さつと顔は不安そうに変化した。

「どのような条件でしょうか？」

「男爵、貴方には五人もの娘さんがいる。」

末娘のレディ・ティアをいただきたい。

その条件がのめないなら、融資は致しません。」

「何をおっしゃる……。娘達は妻の残した宝だ。ティアを手放すなど、できるはずがない。」

「いつかはどこかに嫁ぐものでしょう？それが早まっただけのこと。」

「それに侯爵……、貴方は悪魔族だ。ティアをどうするつもりで……？まさか、おぞましいことをさせるのでは………？」

不敵に微笑めば、青くなり始めた。

「貴方の判断で決まる。それに私は知っていますよ。貴方に多額の借金があることも。もうすぐ返済日でしょう？………では、失礼します。」

言い放つと立ち上がる。イヴァンはドアへ向かった。

馬車のドアが閉まった。

「イヴァン様、どうでしたか？」

従者のアスキスはそう問いかけた。

「もうすぐだ。」

自分に言い聞かせるように呟く。雷鳴がとどろき、強い雨が降りだした。屋敷への道を馬車は走り出した。

十年前、魔王は人間を支配しようと戦争を仕掛けた。三日で人間達は降伏し、この国は悪魔族がいてもおかしくない状況になったのだ。

悪魔族には、男子しか生まれない。子孫を残す為に人間の女を妻とした。

あるパーティーで、恋に落ちた。彼女に。自然を愛しているからこそ、植物の精霊を傷つけてはいない。よく微笑む彼女、美しい髪。手に入れたくてたまらない。彼女が他の男を愛す前に。

「イヴァン様着きました。」

「ああ……。」

馬車を降り、玄関に向かった。

「旦那様、お帰りなさいませ。」

執事に帽子とステッキを預けた。夕食をとる場では、幾人かの給仕がすでに控えている。

「根回しは済んだか？アスキス、ガスト？」

「はい、旦那様。フェアリット男爵様のお知り合いの貴族は買収致しました。また、圧力も多少。使用人を少し唆せることも致しました。」

「よくやったな、アスキス、ガスト。」

「主人の為に働くことが役目ですから、当然です。」「旦那様の幸せを我々は、祈っておりますので。」

赤ワインの香りを楽しみ、口をつけた。料理を口に運ぶ。五日後には、フェアリット男爵はこの屋敷に来るはずだ。

全ては整っていた。

1・悪魔族 侯爵様（後書き）

ティア嬢はまったく登場していませんですけど（笑）

イヴァンはちょっと屈折気味です。

悪魔族といっても、人間とあまり変わらない方向でお願いします（汗）

見た目はまったくの人間です。

2・令嬢の決意

あの火事から数日後。幸いにして家族全員無傷だった。屋敷は燃え尽きてしまい、ホテルでの生活を余儀なくされた。

「お願いです。少しでもいいのです。」

「申し訳ないのですが、新しい事業を予定しております。……一サータも融資できません。本当に……。」

ルーベンス子爵は言葉を濁した。ホテルの壁は薄い。そのために応接間の父とルーベンス子爵の会話が聞こえてきた。

お父様、大丈夫かしら。何かできればいいのだけれど……。そう思っても、ティアにできることはあまりなかった。子爵の帰る音が聞こえた。ティアは応接間のドアをノックする。

「お父様……。」

ティアが声を掛けると、父はため息をのみ込んだ。

「大丈夫だよ。お前は心配しないでいいんだ。」

事業の失敗もあって、借金があることもティアは知っていた。

一人だけ融資をする、と言った侯爵の顔が思い浮かぶ。ティアを嫁がせるだけでいい。そんな思いに取りつかれて首を振った。父の葛藤を知らず、ティアは首を傾げた。

娘が五人と嫡子がいれば、お金がかかるわ。お嫁に行けばいいのかしら。しかし、持参金の用意ができないので相手は見つかるはずがない。

「お父様、私にできることはありませんか？」

父は厳しい表情のままに、口を開いた。

「……婚約という形でティアを望む侯爵がいるのだ。融資の条件は、ティアと引き換えにというもので。多額の融資を約束してくれている。……しかし、侯爵は人間ではない。」「どういふことですか?」「悪魔族だ。十年前の戦争で人間は支配されるように

なった。悪魔族の男に嫁がせる訳にはいかない。」

「私が嫁げば、いくらほどの融資をいただけるのですか？」

「五千万サータだ。」

決意することに、時間はかからなかった。私が嫁げばフェアリット家は救える……。

「私、その方の所にお嫁に行きます。」

父は驚いた様子で、ティアをみつめた。その方が悪魔族でも大丈夫よ。きつと。「しかし、ティア。悪魔族だ。殺される危険だってある。」

「お父様……、私は大丈夫です。だから……。」
しばらくの沈黙。

「すまない、ティア。家を救うために嫁いでくれるか？」

父が涙ぐむ姿を初めて見る。きつと最初で最後だろう。

「はい。」

あの話し合いから四日後のことだった。

2・令嬢の決意（後書き）

あはは（＊、＊）

操作を間違えて、おかしいことになりました。
やり直し。

詰め込み過ぎました。読みにくかったら、ごめんなさい。

サータは架空のお金の単位です。念のため。

3・父との別れ

‘身ひとつで来るように’そう言われていると聞き、ティアは安堵した。火事で持ち物は焼失しているのだった。そのため、恥をかくことはない。

馬車に揺られて、マティンリ侯爵邸に着く。

「どうぞこちらです。」

執事に促されて応接室に通される。ティアは緊張していた。手に汗を握る。

ドアが開く時に僅かに軋んだ音。入ってきたのは、一人の男性で、金色の髪に漆黒の瞳。瞳の中に赤い光が横切ったような気がした。

「契約成立ということですのでよろしいですね。」

腰掛け、口元だけで侯爵は笑みを作った。

「アスキス、用意したものを。」

従者に一声掛け、開けた箱の中には、サータが入っていた。おそろく五千万枚だろう。

「マティンリ侯爵、ありがとうございます。」

「別れの時間を三時までにお済ませください。では、失礼します。」
マティンリ侯爵は応接室から去って行った。

「……お父様、もうすぐお別れですわ。手紙を書きますね。」

ティアは涙をこぼした。父はティアを幼い子供にするかのようにないだめた。

たくさんの不安があるけれど、ここが家になることは変えられない。日常の中に小さな幸せを見つければ、きっと穏やかに暮らせるはずだから。

時間は刻一刻と過ぎていく。

「お父様……。さよなら。」

ティアは父と抱擁をかわした。

本当の気持ち。本心。帰りたい。家族と離れたくない。
でも、そんなこと言えない。

肩を落として去って行く父の後ろ姿。
ティアは立ちつくした。

「ティア様とお呼びしてもかまいませんか？」

「はい。あなたは？」

「メイド頭のサミーノ・フルルと申します。今からティア様のお部屋にご案内致します。」

しばらく歩いた。……一人で歩き回ることはとてもできないことが予想できる。

「ティア様のお部屋です。こちらがリラクスクスルームでございます。御用がありましたら、この鈴を鳴らしてください。」

「はい。」

「こちらが寝室です。」

レース仕様の天蓋布。刺繍された寝具。

どれも素晴らしく、ティアは目を見張った。

「こちらが衣装室です。」クローゼットの中にはきつと夏中に着れないだろうと思われる数のドレス。

「では、浴室へ。」

連れて来られて、ボタンを外される。

「サミーノさん！？待ってくださいー！！あの、私自分でできます。だから。」

「旦那様のご命令です。お任せください。」

「でも……………」

「旦那様のご命令です。」ティアは、羞恥に顔を赤らめた。髪を丁寧に洗われ、体を磨かれる。

コルセットを身に付け、ドレスを着た。

薄い化粧を施され、目を開く。

「もう夕食の時間です。参りましょう。」

「はい。」

ティアは立ち上がった。

喜びのため息をイヴァンはついた。彼女はもう俺のものになる。

――愛しているが、どうすれば、愛されるだろうか。一方的な愛など、虚しいものだろう……………」

父は母を愛していた。しかし、母は憎んでいた。俺にも冷たい仕打ちを向けた。彼女の全てを手に入れない。そのためには……………」

「イヴァン様、夕食の時間です。」

アスキスの声を聞き、そこに向かった。戸惑うように恥じらうように彼女は淑女の礼をした。

ドレスの布地は淡い桃色。リボンとレースの飾り。すべてが彼女らしさを引き立てている。

自分の見立ては間違ってた、と確信する。

胸の高鳴りを隠し、平静を装う。

ディナーが始まった。

3 父との別れ（後書き）

ちよびつと長くなりましたm（―――）m

ディナーのことまで書くつもりでしたが、次話になります。

どうか、お付き合いくださいませ／（^^）／

4・ティナー

食事の席についてからずっと言葉は交わしていない。ティアは幾度かちらりとイヴァンを盗み見た。しかし、漆黒の瞳が感情を映すことはなかった。

空気でさえ、重苦しく感じた。

「……………ティアは本が好きか？」

突然投げ掛けられた問い。いきなり呼び捨てで呼ばれたことも、驚きだった。

ティアは戸惑いながら、応える。

「はい。……………マティンリ侯爵。」

「……………そうか。」

短い返事だった。イヴァンの口はそれ以上言葉を発しようとしないう運ばれてくる料理をただ口にする。そんな食事が苦手なティアは、必死に言葉を紡ぐ。

「どうしてそのようなことをお聞きになるのですか？」

「明日になれば分かる。」「そうですか……………」

それ以上の問いを口にしてもいいのか、わからない。ティアはうつむく。本当は、本当に聞きたかったことがあるのに、聞けない。

「どうして私なの？お姉様達だっというなら、実のところ、少しだけ期待もあった。もしかしたら、誰もが憧れるようなロマンスを自分は得られたのではないかと。」

貴族の結婚は家同士を結びつけることがほとんど。

マティンリ侯爵にとって、フェアリット男爵家が益をもたらすものはなかった。ある可能性が一つ。

望まれたのかもしれない。ティア自身を。

しかし、イヴァンはまるでティアに興味がないように見えた。少しでも、視線がぶつかったりすれば胸の中に安堵が生まれたかもしれない。

ないのに。

だから‘どうして?’という疑問ばかりが浮かぶ。考えているうちに、食事は終わってイヴァンは席を立ってしまう。

メイドの手を借りずに寝間着に着替え、ベッドの中を考える。

私はやっぱり買われたのね……。少しでも期待していたなんて微かなため息を漏らした。明日からどんなふうに過ごせばいいのかしら……。

寝室は月灯りだけ。ティアは心地の良いまどろみに誘われるままに、深い眠りに落ちていった。

4 デイナー（後書き）

遅くなりましたm（　　）m
すみません。

実は、ティア嬢はかなり一人歩きをしています……。というか、二人とも（汗）？
うーん……。
難しいですね（　・　　・　）

5・過去の記憶と疼く傷（前書き）

ほんの少しだけ、暴力的な表現があります。苦手な方はご注意ください。

また、イヴァン視点です。そして、短めです（・・）
遅くなりました。

すみませんm（――）m

5・過去の記憶と疼く傷

「お母様！止めてください！！」

ティーカップが割れる凄まじい音が響いた。

機嫌のよかった母の前に、イヴァンが現れた途端に母はヒステリーをおこした。

「近づかないで！どうして産まれてきたの！？あの男の子供なんて……！何故お前は悪魔族なの……！？」母はイヴァンの足元にティーポットを投げつけた。

「奥様！お止めになってくださいませ！！」

メイドの制止さえ、振り切っている。メイドは床に倒れてしまう。

ティーポットには、まだ熱い紅茶が入っていたらしく、飛び散った。

「熱ッ！！」

ズボンを通して、足にかかったことがわかった。

「やだよ……僕……。」泣き出せば頬に痛みを感じ、首に力を込められる……。

最後の一瞬。見たのは、歪んだ母の顔だった。

「……………」

息が荒くなりながら、勢いよく体を起こした。息を整えようと、呼吸を繰り返すがしばらくの時間を要した。イヴァンは深くため息をついた。

どうして今になって、過去の記憶が……。

ふらつきながら、立ち上がった。

「どうぞ、水をお持ちしました。」

ああ、返事をしながら口に運んだ。

喉が潤うのを感じ、ほっ　と息をつく。

「イヴァン様、普段はまだお休みになっている時間です。……………もう一度。」

「……………仕事があるだろう、終わらせる。」

「昨日と同じことをおっしゃっていますが。」

思い出しながら、苦笑する。

「彼女の身の回りのものを選びに行く。」

「まだ街の店は開いていませんし、これ以上何をお贈りなさるのですか。」

手袋、帽子、靴、ドレス、ハンドバッグ、身の回りの必要性を感じる物などは、思いつく限り贈っている。それらは、全て自分で選んでいた。

……………彼女は知らないだろうが。

「ドレスは何着あってもいいだろう。」

「イヴァン様、メイド頭より衣装室が夏のドレスだけで溢れかえっているそうです。」

……………。

イヴァンは黙り込む。

「お出掛けをなさったらいかがですか？」

「……………今日は、彼女をこの邸の図書室に案内する予定だ。」

「承知いたしました。」

アスキスの用意した衣服に、イヴァンは着替えた。

「どちらに？」

「図書室だ。」

まだ日の光は、一筋も入ってこなかった。

暗闇の中でもイヴァンは難なく足を進められた。

母に憎まれた種族だったから。

6・あなたと私の距離（前書き）

更新できない、とか言っていました、テスト後のちょっとした休みでの更新です。

遅くなり、申し訳ありませんm（——）m
そして今回も短めです……。

6・あなたと私の距離

ティアは小鳥のさえずりで目を覚ました。

一瞬自分がどこに居るのか分からず、数回瞬きを繰り返した。

カーテンから漏れる柔らかな光の眩しさに目を細めた。

ベッドから出て、既に用意されたお湯で顔を洗う。

どこからともなくメイドが現れ、ティアの身じたくを手伝った。

黙々と着替え、メイドの後に付いて行く。

昨夜と全く同じ廊下。一晩で変わるはずはないのだが、気分は落ち込んだ。

毎日食事をするためだけに、ここを歩くようなことはないかしら……。

同じような重い足どりで……。

そんなことを考えてしまい、首を振った。

ティアは、そんな考えを持った自分に少しだけ嫌気がさした。

毎日をどんな風に過ごすかも、イヴァンにどのように歩み寄るかも、全て自分次第なのに……。

そして、今は朝食を食べている。

「あの、これはどのようなお料理ですか？」

それは初めて見たもので、黙々とする食事を脱する為の打開策でもあった。

「……………ブイヤベースだ。」

たった一言で返されてしまった。

「そうなんですか。とても美味しいです。」

「……………そうか。」

また、一言。どうすればよいのか分からなくなる。ゆえにティアは口をつぐんだ。

朝食が終盤になった頃に、イヴァンが口を開く。

「……………このあと図書室に向かう。」

感情を感じられない声音。呟くようにしか応えられない私。

どこかで鋭い痛みがした。でも、それが何なのかはティアは知らない。

6・あなたと私の距離（後書き）

イヴァンはなんであんなにも素っ気ないんでしょう？

書いてる本人も分かりません（<―>。）

ティアは無自覚です……。ちよつとずつ、ですよ……………？

これ以上はネタバレになりますので、自粛！

読んでくださる皆様ありがとうございます
／（＾＾）／

7・侯爵邸の図書室にて

ティアはイヴァンのほんの少し後ろを歩いていた。
大きな扉の前で一瞬立ち止まる。

「ここなんだが……。」
と告げられた。

微かな古めかしい音が聞こえて、扉が開く。
伴われた場所は日の光を呼びこむ大きな窓が一番に目に入ってくる。
それがとても印象的だった。

微かに鼻をくすぐったのは、紙の香り。
どこか懐かしいようなそんなもので。

「……………ここは邸の図書室だ。好きに使っていい。」「……………よろ
しいんですか？」

ティアは驚き、戸惑いながら問う。

「ああ。」

変わらないの短い応え。

「イヴァン様、ありがとうございます。」

ふと一瞬。

イヴァンの表情が柔らかいものになった。

初めて見たイヴァンの笑みだった。ティアも自然と、笑みが溢れる。
それがイヴァンの胸中を乱していることなど、知らずに。

「……………仕事があるから、失礼する。」

「はい。…本当に、ありがとうございます。」

ティアはイヴァンが出て行くのを見送った。

本を一冊手に取り、居心地の良いソファに腰を沈める。

物語は山の神と村娘のものだった。

その本のあるページに。

” いくつかの僕でありますように。 ”

拙い文字での、切実な願い。

インクの指紋まで付いていて。

指紋から相当の幼さがわかって。

書いたのはきつと……イヴァン様だわ。

そう気づけば、どうして？という問いと、つと涙が溢れた。

父の愛に囲まれて、母の愛に囲まれていた自分は、何も憂いたりしなかった。する必要なんてなかった。

そんな幸せをイヴァン様は知らないのかもしれない……。鋭い痛みを覚えた。

私は「いくつかの貴方」の傍に居たい、です……。

人ではない神と村娘の恋。

人ではない悪魔と令嬢の恋。イヴァンは書斎にいた。

少し前に彼女を図書室に案内したところだった。

領地の収支についての手を止めて、思いだす。

ふと見た時の微笑。結った髪が揺れる。言葉を紡ぎだす唇。

いつの間にか、幸せのため息をつけば「早く婚約なさっては、いかがですか？」

アスキスの言葉にかたまった……。

7・侯爵邸の図書室にて（後書き）

お久しぶりです

読んで下さっている皆様。ありがとうございます／＼（＾＾）／
遅筆な自分がうらめしいです（　；　）

ティアはちょっと自覚したのか、してないのか？
微妙なラインです……。

8・ひだまりの中で想うのは

マティンリ侯爵邸に来て、数週間が過ぎていた。

毎日はゆったりと、そして確実に過ぎていった。

あまり好きではない刺繍もしている。

今はアフタヌーンティーの時間で、ティアは邸の庭に居る。

イヴアンは仕事がもう少し片付いたら来る、と聞いている。

柔らかな日差しを浴びながらのお茶は、久しぶりだった。

母が生きていた頃は、よく近場でピクニックをしていた。

思い出の中は幸せな家族ばかり。誰もが別れなど予測していなかった。

ずっと変わらない、そして続くものだと思っていた。

『ティア、誰でもね女の子はお姫様なのよ。』

「おひめさま？じゃあ、おうじさまがむかえにくるの？」

『ええ、あなただけの王子様がきつと。出会えば何度でも何度でも惹かれ合う人よ。』

「ひかれあう？」

『その人のことで胸がドキドキして、時々切なくなるの。』

「ドキドキ？せつない？」『そうよ。大切に、離れたくないと思うの。』

「それなら、トウユリね！」

『トウユリは女の子だわ。王子様は男の人だから……。』

「？」

『まだ少し難しかったかしら？わたくしが言いたかったのは、』

お母様が本当に言いたかったことは、何だったかしら？

一番大切なことが思い出せない。

ティーカップに口を付けたまま、考え込む時間を多く要した。

仕事を終わらせ、邸の庭へ向かった。

彼女と過ごす貴重な時間だった。

そこに着いた時のティアは思案顔で、動作が止まっている。イヴァンは声を掛けようか迷いながら、席につく。

そう言えば、庭でお茶するのは初めてだな……。

提案したのは、彼女らしい。

「ティア？」

弾かれたように、彼女は顔を上げる。

「イヴァン様。お仕事終わったんですか？」

「……………ああ。」

「私、お庭でのティータイムは数年ぶりです。」

ゆっくりと穏やかに。ティアの微笑みが咲いた。

8・ひだまりの中で想うのは（後書き）

遅くなりました（、；、）

そして今回も短い……。

ほのぼのとした雰囲気が出せたでしょうか？
そこが不安材料です。

お気に入り登録数が323件！嬉しい限りです
登録してくださった皆さま、読んでくださる皆さま。
本当にありがとうございます（*^^*）

9・胸騒ぎと切れた鎖

仕事の手を休めて、イヴァンは窓の外を見ていた。

少しずつ秋の訪れが、庭を朱や黄色に色づきさせ始める。

「イヴァン様。フェアリット男爵家嫡子、ルイファン様から御手紙です。」

アスキスから手紙を受け取り、ペーパーナイフで封を切る。内容が頭に入ってこない。そのため、幾度も文字を追う。

「…どうすればいい？」

アスキスへの問いかけではない。自分自身へのものだった。

「どういった内容ですか、イヴァン様？」

その手紙をアスキスに手渡した。

イヴァンは長くため息をついた。

自分がそうするべきだということは、十分過ぎるほどわかっていた。しかし、一度手に入れたら手放せない。

自分勝手だというのは重々承知だ。

このまま、彼女に知らせずにいたら？
などと卑怯な考えさえ、うまれてくる。
ここに居るように懇願すべきなのか？

「どうするおつもりですか？」

選択を迫られていた。

彼女は父親を心から愛している。

きっと知らせずにいて、事実を知られたら、向けられる視線は怒りではなく、悲しみ。

そんなこと耐えられそうにない。

「……………、ティア。」

口の中で呟き、息が詰まるように感じた。

イヴァンの中にあるものは火に炙られるような焦燥だった。

その日は何でもない、いつもと変わらない一日であるはずだった。いつも通りの朝。

ティアは、父から贈られた娘たち全員お揃いのペンダントを取り出した。

美しい白金の細かな装飾を施された台座。

カットされてはいないが、輝きを閉じ込めつつもほんの少し光を放つ琥珀石。

柔らかな蜜の色は、ティアの気持ちを落ち着かせる。

眺めていたそれをなおそうと、オルゴールを開けた時だった。

音も鳴らず、ペンダントの鎖が切れてしまったのだった。

ざわり、と胸を波立たせる不安はどんどんひろがっていく。

感覚的でティアにもよく分からない。

でも、何かがそこには存在していた。

きつと大丈夫だわ。何も悪いことなんて起きないはず。ただ、鎖が

切れただけ。

「イヴァン様に御願いで、直していただけるように手配しなくてはだめね。」

自分に言い聞かせるように、ティアはそつと呟く。

ちょうどその時。

「ティア様、旦那様がお呼びでございます。」

メイド頭に告げられる。

伴われて行く間の胸中はひどく騒がしい。

邸の廊下を長く感じた。

ドアをノックする硬い音。

イヴァンは窓の所に佇んでいた。

こちらを見ようとせぜずに、今まで聞いたことがないほどの静かな低い声。

「ルイファン殿の手紙を読めばすぐに解る。」

アスキスがさつと一枚の紙を手渡す。

「.....フェアリット男爵が病により床へ臥している。」

頭が追い付かない。

広がるのは真つ白で空虚な世界のみ。

9・胸騒ぎと切れた鎖（後書き）

更新が遅くなり申し訳ありません。

「胸騒ぎと切れた鎖」如何でしょうか？

イヴァンもティアも苦しい展開となっていました（・・・）
？

お付き合いくださいませ。

読んでくださった皆様、お気に入り登録をしてくださった皆様。本当にありがとうございます！！

10・夜空に瞬く（前書き）

2011年初投稿が、重いです。
ちよつと残酷な表現があります。

苦手な方はご注意くださいませm
遅くなりました（．．）
———m

10・夜空に瞬く

ある女性が似つかわしくない建物へ、入って行った。華やかなドレスに、目鼻立ちが整った顔立ち。

瞳は少し勝ち気そうな灰紫。

入って行く建物は壮大だが、古めかしく灯りはあまりにも少ない。

「旦那様がお待ちかねです。」

掠れた執事の声に、その女性は頬を紅潮させた。

一番玄関から遠い部屋に向かう。

「お連れいたしました。」

中から返事が聞こえて、通される。

女性はうつむきがちで、何かを待っていた。

「下がれ。」

執事は足音も立てず、去った。

手を引かれ、女性の身体はソファーに投げ出される。男は馬乗りになり、露になった白磁の肌に、歯をたてた。

「……………や。」

痛みはほんの一瞬。そのあとの女性は恍惚とした表情を浮かべている。

悪魔にとって、人間の女の血は魔力を得る為の美酒だった。

「事は進んでいるか？」

「……はい……！」

男は含み笑いをほんの一瞬だけ漏らした。
女性はキスをねだるように、手を伸ばす。

「褒美だ。」

軽く音を立てて唇が重なり合った。

ティアはぼんやりと、自分が使っているリラックスルームのソファ
ーに座っていた。

父の病の事実を知ってから、数日が過ぎていた。

明日には馬車で自宅に戻る手筈になっている。

病状については何も聞いていなかった。

いや、聞きたくなかったのだ。

お父様はきつと軽い病。

すぐに善くなるはず。

そう信じたいのに……。

あの日の胸騒ぎは止んでいない。

むしろ、ざわつきは大きくなっているような気さえする。

どうして、私はこんなにも無力なのかしら……。

何もできない。

ここに居ても、フェアリット邸に戻っても。

弱くて、ただ、祈るだけ。いつの間にか闇に包まれ始めて、柔らかな月明かりが一筋。

瞬く星はどこか儚げで……………。

神様、父をお守りください……。

「アスキス、奇妙だと思わないか？」

書斎で病状についての文書を見ながら、イヴァンは問いかけた。

「はい。聞いたこともない症状です。医者も首を傾げていると。」

「ああ。体中に紫色の痣ができ、その箇所からの出血。粘膜が極度

に弱くなり、少々の刺激での出血。

それだけじゃない。男爵を隔離して治療しているわけでもないのに、新たに発病が確認されない……。」

そこで一旦、イヴァンは息を吐いた。

もし感染する恐れがあつたなら、やはり彼女をここに留めようか、という考えもあつたのだった。

「最後にフェアリット男爵に会った時、病の”におい”は全くしなかった。」

少しでも病の兆候がある場合、直感的に感じることができる。互いに黙り込む。頭のある部分に、もやが存在しているような違和感。

「イヴァン様、推測ですが……………」

「言ってくれ。」

「悪魔による故意なもの、術による呪いではありませんか？」

頭がすつきりと、もやが霧散したようだった。

それと同時に、イヴァンの顔から血の気が退いていく。

「何故フェアリット男爵に術をかける必要がある？」

出てくるのは疑問ばかりだった。

10・夜空に瞬く（後書き）

読んで下さる皆様ありがとうございます！

お気に入り登録が400件越えて、嬉しい限りです〇（　　）〇

！！

タイトルはとても悩みました。3つの場面があり、迷いに迷い……。

『夜空に瞬く』に致しました。

これからも遅筆な作者にお付き合いくださいませ。

11・気付いた時には

ティア…………。

口の中でイヴァンは呟く。頬にある涙の跡をそつとなぞった。柔らかく、儚げな月明かりはティアを照らしている。

視線は唇へと移った。

沸き上がる衝動と理性。それらは、イヴァンの胸中で争っていた。明日には彼女は居なくなってしまう。

俺の身勝手な行動を許せ、ティア…。

イヴァンは柔らかく唇を重ね、しっとりとしたそれをついばんだ。甘い……。彼女だからか、否か。判らない。

夜着をはだけさせ、首筋に吸い付く。

「……………ん。」

彼女は身動きした。きっとこのまま続ければ、ティアは起きる。この行為は彼女の本意ではないはずだ。今はまだ。いつか、再び。

日はもうすぐ真上にくる頃だった。

フェアリット邸に向かう馬車には、既に荷を積み終わっている。ゆるく結われた彼女の髪を風がもてあそぶ様に吹く。

「あの、イヴァン様……？」

「どうかしたか？」

「本当によろしいのですか？」

「ああ、かまわない。ティアの為に用意させたものばかりだ。」

ティアは戸惑っている様子で、瞳が揺れている。

彼女のドレス等は全て持ち帰るように、メイド頭に指示したからだ
った。

ティアは結局、イヴァンの言う通りに受け入れたのだった。

「ありがとうございます。」

小さな声で、感謝の意を伝える彼女。

その後にふわりと微笑む。笑顔の見納めだ。父親が心配で堪らない
はずの彼女が俺の為にくれたもの。

「…………お世話になりました。」

「ああ。」

平静を装いながら、応える。この邸で共に過ごした時間は長いよう
で短い。

「お身体に気を…………つけて下さい。無理を…………なさらないで下さ
い。」

耳に届いた声。見つめれば視線が合い、ティアが先にうつむいてし

まう。

「わかつている。……もう出発した方が良い。フェアリット邸には日が暮れる前に着くだろう。」

頷き、ささやかな別れの言葉を口にし、彼女は馬車に乗り込む。馬車のドアが閉まる。

ゆっくりと加速していく馬車。遠ざかり終には見えなくなる。一陣の風が吹いた。

「……失礼ながら申し上げます。これで本当に宜しかったのですか？」

「かまわない。」

自分に言い聞かせる。

胸が酷くざわつき、手に力を込める。自身の感情を握り潰すように抑え込むように。

考えることはただ一つ。

フェアリット男爵の‘呪い’を解くこと。

それは彼女を悲しませる元凶を取り除くことになるのだから。

朝からの慌ただしさが消えると、帰り支度は全て調っていた。
身の回りの物をいただけたことはありがたいけれど。申し訳ない気
持ちで苦しささえ、感じてしまう。
ただ、願うのは。

イヴァン様が父と同じような病にかからず、心穏やかに生活を送ら
れること。

「もう出発した方が良い。」

そんな言葉に急かされた気がして。
ありきたりな別れの言葉を口にして。馬車に乗り込む。小刻みな揺
れがティアの身体を揺らす。

私がこの邸にいた意味は何かしら……？
きつと迷惑ばかり掛けたかもしれない。
イヴァンの漆黒の瞳を思い浮かべた。
午後のお茶はいつだって、お仕事の合間に来てくれた。

旦那様は図書室に人が出入りなさるのを好ましく思っておりません。

これはサミーノさんに聞いたこと。
手持ちぶさたになるに違いないティアに、その場所を許してくれた。
気遣いから、優しさが感じられて。時々見ることできた微笑。強
い眼差しに引き込まれそうで、目を反らしてしまうこともあった。
拙い文字の願いを見つけた時。
いつかの貴方の傍に居たい、と…………。

瞳からぼとり、と雫が落ちた。

ティアは振り向き、ぼやけた視界で小さなイヴァンの姿を見つけた。また、涙が零れた。

馬車が曲がったのか、もう見ることはかなわない。

お父様、これから戻ります。病で本当に大変な思いをなさっているに。ごめんなさい。

嗚咽が漏れた。

今、想うのは……イヴァン様。

馬車で半日の道のりなら、会うことだってできるかもしれない。でも会う約束がなければ、会うことなんてできない……………。

……貴方が好きです。

好きなんです……。

少しずつ、貴方を知る度に育つ想いに私は気付けなかった。後悔してもしきれない……………。

「わたくしが言いたかったことは、その想いに気付いたその時には、その想いを大切にしていね。そして傍にいろ。伝えることができないけど、何があっても……………まだ難しかったかしら？」
あの日の母の言葉が頭に響いた。

11・気付いた時には（後書き）

『11・気付いた時には』 如何でしょうか？

作者が感情移入しまくりで、文章がおかしい箇所があるかもしれない。

その時はご指摘よろしくお願いいたします。

遅くなり、申し訳ありません（・・）

お気に入り登録が462件 ありがとうございます！！

お気に入り登録に一喜一憂の作者ですo(^o^)o

これからも遅筆な作者に、『悪魔の涙』の二人にお付き合いくださいませ。

12・新しく懐かしの邸（前書き）

ちよつと血とがあります。苦手な方はご注意ください。

12・新しく懐かしの邸

フェアリット邸に着き、迎えてくれたのは以前から仕えてくれた執事達と弟ルイファンだった。顔には疲労の色が窺えた。彼らは微笑もうと努力したようだが、その表情が作られることはなかった。「ティアお姉様！おかえりなさい。」

「ティアお嬢様、おかえりなさいませ。」

「ただいま戻りました。フェアリット家がこの邸に居を移して、私は初めてですからよろしくお願いね。」

ティアも笑みを作ろうと努力するが、それが出来ずに憂いを含む表情になる。

帰って来たという実感は今更ながらにやってきたのだった。

「今夜はお姉様は休んでください。父上様とは明日……」ルイファン、それは出来そうにないわ……。」

お父様のご病気がどのようなものでも、私は受け止めなくては。

「……他のお姉様達は父上様が病になってから初めての面会で、……卒倒されてしまったのです。」

ルイファンは一端そこで、息をついた。

「僕自身も初めての面会は……、落ち着いて面会することができませんでした……。」

その様子にティアの胸もざわつく。

それほどお父様の病状が悪いなんて。

悪い予感ほど当たってしまう。どうしてかしら……？疑問を口には出さずに徐々にうなだれていく弟を見つめていた。

「……父上様の体に障ります。それに感染者はまだ居ませんが、医者も首を傾げてしまったのです。何も分からない未知の病と言える、とも言われました。」

「お父様に会いたい。だってたった一人の肉親でしょう？私が会ったところで何かできる訳ではないけど……。」

暫しの沈黙。息することさえも、遠慮してしまうほどの。その沈黙を破ったのはルイファンだった。

「父上様の寝室は邸の玄関から最も遠い部屋です。ティアお姉様、行きましょう。」

「以前の邸より広くなったわね。」

しかし、無駄な装飾は見当たらない。飾らない故に気品が感じられる。

「…マティンリ侯爵の融資のおかげです。」

その場に流れた奇妙な空気は消えることなく、留まっている。その後続く言葉は聞きたくなかった。

「父上様はずっと嘆いておられました。」

明らかに含まれる非難の色に、ティアは体を震わせた。それを弟がどのように解釈したのか判らない。

「こちらが父上様の寝室です。体中から血が止まらない。少量でリズムがあるそうなんです……。」

ルイファンがノックをして、中にいた医者が返事を返した。

扉を開けた瞬間、ティアは血の匂いにあてられた。目眩に襲われながらも父の姿を見た。

余りの姿に驚き、意識が白濁していくのを感じ、立っていることができなかった。

意識が覚醒する。寝ている間に幾度も幾度も、出てきた光景。全身を覆う白い筈の包帯は赤黒かった。

ティアは怖いと感じた。得体の知れない恐怖と言える。息が苦しくなつて、目に入つた水差しを取ろうとした。横から手が伸ばされる。ティアはその人を見た。

「……トウユリ？」

「はい、ティア様。」

さつきまでの感情が瞬く間に消えてしまった。次に現れたのは安堵だった。

「戻つて来てくれたのね？」

「ルイファン様の取り計らいです。ティア様がお戻りになると聞きましたから。」

「……敬語やめてくれないかしら？」

「できません。とりあえず、今夜はお休みになつてくださいませ。」
反発したい気持ちはあつたが、身体がそれを許さないように重い。

「明日の朝、ほんの数分でいいの。……幼なじみとして話したいのよ。」

「今は休んでください。……わたしも聞きたいことがあるから。」
完全な闇夜だった。月明かりも射し込まない。それでも寂しさを感じなかった。

光を眩しく感じながら、ティアは目を覚ました。

身支度をして、ティアはトウユリに手伝ってもらい、淡いグリーン
のドレスを着た。袖には細やかなレース。ふと、イヴァンの顔が頭
の中を横切った。

トウユリが取り出したのは、レースのチョーカーだった。ドレスと
合っている物ではないと、ティアは困惑した。

それを問いかけてみる。

「…………… ねえ、どうしてチョーカーを着けるの？」

彼女はそつとため息を吐いた。

「ここが痒いとか、痛んだりする？」

トウユリは首筋のある場所を指で軽く触れながら、ティアの疑問には答えてくれずに質問をする。

そのことに、ほんの少しティアは拗ねた。彼女が指す所はティアには鏡を使っても見えない場所だった。

「そんなことはないのだけど、…………… どうして？」

「淑女になんてことしてるの……………！」

トウユリが口の中で唸るように呟く。小さな声のためにティアの耳には意味を為す言葉としては届かなかった。

「トウユリ？」

はつとしたようにトウユリは何でもないと返事を返した。

「せっかくあるのだから、使わないと勿体ないでしょう？」

まだ怪訝に思いつつ、ティアは従った。

髪を結われながら、ティアは今日は四人の姉達に会うことについて考えていた。その前にもう一度お父様にお会いできるかしら？

「終わりました。ティア様。」

主従の関係が再び戻ってしまい、残念な気持ちを胸の内に留めながら立ち上がった。

窓の側に行き、遠くを眺めた。昨日と同じで晴れている空を。雲が一つだけ迷子になっていた。

12・新しく懐かしの邸（後書き）

「12・新しく懐かしの邸」如何でしょうか？

イヴァンはフェアリット家側の人間には嫌われてしまっています（
＜―＞。）

まずは悪魔族ということと、次はティアと家族を引き離したということ。

トウユリが初登場です！！

読んで下さった皆様、お気に入り登録をして下さった皆様、本当に
ありがとうございます（＾Ｏ＾）

これからも遅筆な作者にお付き合ってください！

13・花と灰色の貴婦人

その夜の夜空は雲で覆われている。完全な闇夜。

“呪い”については少しずつ明らかになってきた。まだ不明な部分もあることはあるが。

悪魔の力による「青血呪^{せいけつしゅ}」。

呪う対象者の血、または血縁者の血とクサカガリという植物から取れる植物油を混ぜ合わせる。

それを悪魔が作り出す魔力の結晶に塗り立てて、コウヌギという樹の根本に埋める。それほど手間がかかる訳ではない。しかし、呪いの効果は強力なもの。

また、危険も伴う。呪いを解く為には魔力の結晶を破壊する必要がある。そのために悪魔は魔力のほとんどを失う。一方、成功すれば魔力のうち「治癒力」が尋常ではなくなる。

ここで最大の疑問点がある。

対象者、または血縁者の血をその悪魔はどうやって手に入れたのだろうか、ということだった。フェアリット男爵が怪我をしたという報告も、親類縁者にも同じことはない。

もちろん、彼女にも。それならば考えられることは一つである。

「アスキス、フェアリット男爵一家の半年前からの行動を調べられるか？」

闇に潜み、気配を消していたアスキスが姿を現す。

「出来うる限りは。公式な場だけではなく、非公式な場もでしょうか？」

イヴァンは小さく頷いた。「最低限の記憶操作を行うことを許可する。」

人間の記憶操作をするのは、赦されたことではない。ほんの少しの記憶でもこれからの人生に少なからず影響する。つまりは人生を操作することになるのだ。

「仰せのままに。」

アスキスが一言残し、去る。その背は既に見えず。

イヴァンは自身のすべきことを思い浮かべる。悪魔族の社交場での悪魔族の動向を調べることだ。

もし彼方に気付かれたら、どう行動を起こすだろうか。コウヌギの樹を特定されないように、術を施すか。直接争うことになるか。

「考えても仕方がないかもしれないな。」

その時の結末は、誰もが知ることができないのだから。静かな声音で苦し気な笑みをイヴァンは浮かべた。まだ闇は明けない。赤い光が二つ、一瞬横切った。

自室の居心地の良いソファーに身体を預ける。

何もすることがない、完全に持ちこたえきれない状態だ。まず、父の病状が気になって出かける気は毛頭ない。側に控えているトゥユリに話しかける。

「……ねえ、私ができることってあるかしら？」

考え込むトゥユリに確かな答えを期待する。

「ティア様ご自身が健康でいらつしやること、これまでと同様に面会をなさること……でしょうか？」

ティアもその二つくらいしか思い付かなかった。

ふと気がついたように、彼女が小さな声を上げた。

「言って？」

一呼吸の間と窓からの風の音が重なる。

「……以前の邸と比べると花が少ないですわ。」

花が好きな母の意向で、邸中に溢れていた。母が亡くなってからも使用人達や姉妹で生けたり、花瓶の水を替えたりしていた。

ある日一度だけ目にしたことがある。

父が母の特に好きだったチューリップに触れながら、呟いた「リディアンヌ」母の名前。

「お父様の寝室に花はあったかしら？」

なかった筈だと思いつつ尋ねる。

「……いえ。」

使用人も手が回らないのかもしれない。

皆疲れた顔で、どこかせかせかしている。

邸中の空気が重いと感ずることが多々あることも事実だ。

ああ、でもチューリップは季節が違う。球根を植えたいけれど、鉢植えは駄目なもの……。考え事はノックの音によって遮られる。

「申し訳ありません。ルイファン様は所用で外出されていますし、アレンドール様はトゥサルト教会に。カンヌ様とローヌ様は体調を崩しておりますし……。サラ様は何処へかは分かりませんが出掛けてられましたので、ティア様をお願いしなければならぬのですが……。」

「私は構わないけれど、どうかしたの？」

侍女長はほっとした表情を作り、すぐに顔を引き締める。

「玄関にうずくまっていられしやる方が……！」

「どうして客室で休ませて差し上げないの?!」

そう言った時には、ティアは出来る限りの速さで玄関に向かう。侍女長の謝罪も、トゥユリの制止も聞いていなかった。

玄関の扉を開ける。一人の女性が石畳にうずくまっている。

黒髪に幾本かの白髪が混じり、地味な灰色のドレスとくたびれたようなショール。それは肩から落ちてしまっていた。

「どうぞ、中へお入りください。」

その人はゆっくりと顔を上げた。青白い顔、渴いてしまい割れた唇。弱々しい声だが、しっかりとした口調。

「少し休めば善くなりますから、お気遣いなく。」

「遠慮なさないで。お休みになるならこの邸の部屋を使って下さ

い。」

「……これは、罰なの。私がしてしまったことの……。」「
婦人が紡いだ言葉が何を意味しているか解らずに、ティアは困惑する。」

「……とにかく、入って下さい。風が冷たくなってきましたから。」
暫しの沈黙。

「人間ほど弱くて、ずるい生き物はないわ。」

そう思わないかしら？とその人の瞳はティアに向けられた。その眼差しはティアの胸中を乱す。

「お言葉に甘えさせて頂いても？」

婦人の言葉にティアは慌てて笑みを浮かべる。トウユリが控えめに扉を開けた。冷たい風に追い立てられる様にティアは立ち上がる。その女性はティアに導かれるがままに、足をふらつかせながら一歩踏み出した。

13 花と灰色の貴婦人（後書き）

「13 花と灰色の貴婦人」如何でしょうか？
前回の更新から随分間が開いてしまい（；o；）

読んで下さった皆様、お気に入り登録して下さい
下さった皆様ありがとうございます
ございます（^o^）ノ

これからも遅筆な作者にお付き合い下さいませ。

14・悪魔族の男達

柔らかな暖かみのある灯り。人々の談笑する声がざわめく。居心地良さと緊張感という相反するものが存在している。血の魔力を得るための場所。

「マティンリ侯爵がこんな所に来るなんて珍しいですな。」

恰幅が良く、緩んだ表情に口元。顎髭を手で撫で付けている。マキシス公爵という悪魔族公爵だ。

「来てはいけないのですか、マキシス公爵？」

「いや、そういう訳では無いのだがね。単に驚いただけなんだ。」

「時々、無性に危ない火遊びに手を出したくなります。」

こういった場に真面目な台詞は不要だ。情報を巧く引き出すだけでいい。

「君はこんな所に頼る必要は無いだろう？……フェアリット家の五女を手に入れたと聞いたよ。」

「……、たまには違った酒も味わいたいと思いましたから。」

でっぷりとした公爵は可笑しそうにクツクツと喉を鳴らす。その様に、イヴァンは顔に青筋を浮かべないよう慎重に表情を選ぶ。

「そう言えば、軽口伯爵が言っていたな。マティンリ侯爵の義兄になる、と。」

「ストリーブル伯爵が？何故です？」

「…フェアリット家の四女と婚約したと聞いたんだが。まだ噂としてしか、聞いたことがない。」

「それは知りませんでした。ストリーブル伯爵とはあまり関わりもありませんから。」

ストリーブル伯爵が、とイヴァンは己の頭の中に記憶した。マキシス公爵は続けて楽しげに言葉を紡いだ。

「姉妹の年若い順に決まるなんて姉達は気がないだろうな。」
明らかに含まれる侮蔑の色。フェアリット家には社交界でのかの有

名な噂も存在している。

公爵は親しくしている貴族に声を掛けられ、イヴァンは挨拶をして離れた。仮にストリーブル卿が「青血呪」の術者ならば、四女の血を手に入れることは可能だ。利用することだけが目的なら悪魔はどんなことでも出来る。

目の前の光景に不快感を覚える。人間の致死量にあたる血を貪る悪魔族。かなり悪趣味だ。飲まずとも魔力は減ることなど無いのに。勿論、増えることもないのだが。

自分も同族であることに嫌悪感が生じてきた。

あの月明かりの夜に感じた衝動は触れたいという思いだけではなかったのだから。所詮、己も同じなのだ、と諦めの気持ちが広がった。視界を閉ざせばざわめきは遠くへ潮がひくように、消えていった。

ガサリ、という大きな音に令嬢は肩を震わした。内心恐怖に苛まれながらも、音の方向へ目を向ける。視線の先にいたのは、愛するその人。ほっと安堵のため息をついた。風が彼の邪魔をするかのように木々を揺らす。

「…何か変わったことは？」

挨拶も無しに逢瀬の度に繰り返される問い。

「……妹が帰って来ましたわ。それだけです。」

昼間の空の下で窺える男の表情には何も無い。令嬢に対する思慕も、何もかも。瞳に浮かぶのは、怪しい色だけであった。

「余り此処に立ち寄るな、と言った筈だが？」

冷淡な声音に気落ちしそうになりながらも、答える。

「お父様のご病気が善くなるようにと、お祈りに来ただけですわ。ついでに貴方が言ったおまじないの木を確かめに……。」

「それが余計なことだと言っている。」

分かりました、と小さく呟くように伝える。

そんな姿を男は変わらず冷たい目で見ていた。何も知らぬ愚かな娘。フェアリット男爵を蝕む呪いを「病が善くなるおまじない」であると、俺が言ったことを信じている。立ち去る素振りを見せれば、慌てたように声をかける。

「あの、次はいつ……？」

その声にさえ男は何も応えなかった。

やり取りしている彼らを窺う男がいた。アスキスである。

「やはり、親族のうちあの人……。」

一人呟くアスキスに近寄る後ろの黒い影。一瞬の油断。気づいた時には頭に受けた衝撃。暗くなる視界。草を踏み分ける音。

「後ろが疎かになるなんて従者としてどうなんですかねえ？」

間延びした声で言いながら、アスキスが注視していた主人は話を終えたようだ。

「その男は？」

「マティンリ侯爵の従者ですよ。やっと気づいたようですね。」捕らえますか？その問いに答え

「まともにやり合えば、此方が危ない。」

と男は言った。

鐘が鳴り出した。荘厳で響く音が周りに拡がっていった。

14・悪魔族の男達（後書き）

「14・悪魔族の男達」如何でしょうか？
ティアが出て来ない……。何だか違う方向に。次はちゃんと出します…！

これからお付き合いくださいませ。

15・彼女の物語

「何かお困りになっっていることはありませんか？ベティさん。」

ローズティーに手をのびながらティアは問う。

「いいえ。此処は居心地が良くて、つい長居をしたわ。」

約二週間という時間。ごめんなさいね、と彼女は囁くように言った。

「ただ一つお願いをしても良いかしら？」

「はい、どのようなことですか？」

「ただね、老いた後悔ばかりしている女の話聞いてくれるだけで良いのよ。」

其処で一旦ベティは言葉を切る。ティアは驚き戸惑いながらも先を促す。それは長い彼女の物語だった。

「ベティ！」

婚約者である彼に名前を呼ばれる。未来を夢見ながら過ごす穏やかな毎日。

それは粉々に砕け散った。

ある一人の悪魔によって。

「彼が居なくなっただ？……嘘よ、彼が死ぬはずないわ！」

認めないと言いながらも、どこか遠い場所へと、彼の姿が霞んでゆく。ベティの世界から色という輝きが失せていった。

そして現れたのは、一人の怪し気な香りを持つ男。

「行こうか？」

「……どこへ行くの？」

「入り口は複雑だ。」

男はそう言っただけで、もう何も言わなかった。少女の意識は闇の中へと消えていった。

彼女は息をついた。瞳の光は暗く、翳っている。

「それから私はその男性が婚約者を死に至らしめたということを知ったの。」

ずっと憎まなければいけない、と思い込んで過ごして。だから、生まれてくる子も……憎まなければいけないなんて思ったのよ。」

でも、そんなことは出来なかったわ、彼女は呟く。

自分を求め、私が抱けば安心したように笑うその子は守らなければならぬ存在だった。

「何度も願ったわ。……悪魔族でなければいいのに、って。そうしたら私は何にも邪魔されずに大切にできるのに。」

そしてまた彼女は言葉を紡ぐ。

「夫が病に倒れた時、私は去ることばかり考えた。……私は逃げたの。全てのものから、夫からも、息子からも、自分自身からも。私が弱くて、狡いからだわ。でもティアさん貴女は違うわね。」

「……あの？」

「貴女の愛がきつと貴女が想う人を救うでしょう。」

「ベティさん、貴女の……。」

「もう何も聞かないで、言わないで。」

「ごめんなさいね、と彼女は言う。」

「ありがとう、ティアさん。お話が出来てよかったわ。」

彼女の笑みは悲しげだが、美しかった。晴れやかな表情をしている。ティアは彼女の手を握った。小さな声で

「……お母様。」

と呟く。

「ごめんなさい、母が恋しくなってしまうて……。」
きつと見透かされている。

わたしが嘘をついていること。

この出会いは偶然ではなくて、彼女自身が望んだことなのだ。ティアは、それをはっきりと解っていた。

「また、お会いすることは出来ますか？」

彼女が少し首を振る。

「……きつと、」。

余りに小さな声の為に、聞き取れない。

「ローズティーをありがとう、ティアさん。私はもう行かなくてはならない時間だわ。」

疑問を持ちながら、ティアも立ち上がる。

やけに自身の身体が重かった。

15・彼女の物語（後書き）

遅くなりました。申し訳ありません。

「彼女の物語」如何でしょうか？

ちよつとぐちゃぐちゃしてますね（＜
―＞
）
はあ、表現力不足。

16・想いの行き先

ふと物思いに沈む。紅茶を運ぶ手も止まっており、ノック音も聞こえていなかった。

「ティア？ぼんやりしているわね、どうしたの？」

「一つ年上の姉、サラだった。」

「サラお姉様……！あの、いつから？」

「ついさっきよ？」

ノックしても気づかないんだもの、姉が呟く。

「ご病気がどんどん進行しているって聞いたの。」

「あなたは何も聞いていないのね？」

その言葉にティアは疑問を持った眼差しを向ける。

その様子に姉がため息を小さくつく。

きっと伝えることは侯爵にとっては、本意でないに違いない。

もう子供ではない。まだ大人でもないけれど。知り、全てを受けとめることだって出来る筈だ。

「何も……？サラお姉様、どういうことなの、何があるの？」

「落ち着いて聞いてちょうだい、ティア。お父様のご病気は悪魔に因る“青血呪”という呪い。」

ティアの瞳に驚愕の色が浮かぶ。

「私は身近な処にいる悪魔族に注意すべきだと思ったわ。」

もしかして、イヴァン様が、呪いを？でも、どうして？何の為に？

「ティア、あなたは想い人さえ疑うの？」

「……………」

「言ったでしょう？『思った』って。あなたをこの邸に帰らせた時点でその疑いは晴れているわ。」

でも、どうしても不信感を拭えない。

「ウィリアムが言っていたのだけれど、マティンリ侯爵は呪いを解くために奔走しているって。」

「でも悪魔族と人間は相容れない、聞いたもの。」

「確かに悪魔族と人間は違う。でも、その差は小さいのよ。魔力持ち、丈夫な身体を持っている。感情だって持ち合わせているし、理性も持ち合わせているわ。人を愛することも出来るのよ。そうでなくちゃ、私は何を信じて彼を愛したというの？あなたは何を信じて恋をしたの？」

確かに自分の好きな人を疑うのは、自分を信じていないことと相違ない。

ティアは自身を恥じ、うつむいた。

「お父様の病状は急激に悪くなることなんてないわ。少しの間出掛けても平気よ？」

「でも、……………」

「お父様の為に動いて頂いているし、……………本当は会いたいのでしょう？」

お父様のことがあつて、知らない振りをして、考えない振りをして本心ではずっとあのままでいいの？っていう後悔が消えなくて。約束がなければ、なんて只の言い訳。

会いに行くことが出来る距離のうちに、行かなくちゃ。

「私、行つてきます……………！サラお姉様ありがとうございます！」

ティアは立ち上がり、馬車の用意をするようにメイドに頼む。トゥユリが扉を開け、ティアが部屋を出る。トゥユリが閉める直前。

「ティアは“マティンリ侯爵”に会いに行くのよ、“悪魔”ではないわ。」

「存じております、サラ様。」

しつかりした声。それには力が込もっている。

扉が閉まる音がやけに大きく聞こえた。

それより二時間ほど前にイヴァンはある邸に居た。

この間の公爵の邸で開かれたピアノ演奏会に来たためだった。

会場は和やかな雰囲気に入れられ、談笑する声が彼方此方であがっている。

「やあ！マティンリ侯爵！」

陽気で馴れ馴れしいとさえ感じる声の主は、軽口伯爵ことストリーブル伯爵だった。以前見かけた時と何ら変わった様子はない。此方に対する敵意はない。これが演技ならば、相当の切れ者だ。

「ストリーブル伯爵、久しぶりですね。」

「堅くならないでくれよ。お義兄さんと呼んでくれ。いや、お互い最愛の人と結ばれるのは先になりそうだが。」

「よくご存知ですね。流石情報が早い。」

「悪魔族との婚約、婚姻の話はすぐ広まるものだからね。」

ふと空気が揺れた。それは術者の悪魔しか判らないもので、誰かが門を通ろうとしたらしい。魔力が感じられない。それならば、迷い人だろうか。

「申し訳ないのですが、今日は戻りたいと思います。」

「そうかい？また今度、義兄弟水入らずで食事でもどうだい？」

「……楽しみですね。」

注意深く相手を観察しながら、応える。足早に出口に向かう。それ故に肩がぶつかり合う。

「申し訳ない、ソロン子爵。」

「いえ。」

男性用のコロンと何かの混じり合った匂いが鼻につく。そして一瞬の違和感。

しかし、それも霧散していく。イヴァンは、ただ帰路に急いだ。

16・想いの行き先（後書き）

「16・想いの行き先」如何でしょうか？

ちよつと唐突かな、とも思いましたが、進めます。

読んで下さる皆様、ありがとうございます（＾Ｏ＾）
遅筆な作者にお付き合ってくださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3221m/>

悪魔の涙

2011年9月4日11時43分発行